

大正五年（一九一六）から十年（一九二一）にかけ、「文学に現れた我が国民思想の研究」という、四冊の本が次々と出版された。岐阜県の生んだ、近代日本を代表する歴史学者であり、東洋哲学者でもある津田左右吉の著書である。

左右吉がこの研究に入ったのは、明治三十三年（一九〇〇）、二十七歳のときであった。最初の一冊を世に出す十六、七年も前のことである。このころ、彼は、千葉県の中学校で歴史の教師をしていたが、「学問研究者として歩みたい。」という強い望みをもっていた。しかし、そのための時間もなく、研究にも打ち込めず、思い悩む毎日が続いた。

このころ、幸いにも、東京のドイツ学協会から、彼に来てほしいという要請があったのである。なんとしても心のもやもやをふつきりたいと思っていた彼は、これを転機に学問研究者として生きようと決意した。

左右吉は、明治の初めに、下米田（今の美濃加茂市）で生まれ、新しい社会の発展とともに育ってきた。それだけに、明治維新には深い関心をもっていた。そこで彼は、幕末から明治維新のことについて、思想の面から考えてみることにした。ヨーロッパ文化から学ぶために、まず、幕府が取り寄せた書物を読むことから始めた。これが研究の始まりであった。ところが、一つ疑問を解決しようと思つてそれにかかわる書物を読むと、それは解決しないまま、また新しい疑問が生まれてくるのである。また、一つの疑問を解決したことにより、別の新しい疑問が生まれてくることも数多くあった。こうして、次々と疑問が増していったのである。

いつものように机に向かっていた彼の頭に、ふと、こんな思いが浮かんできた。

「どんなことでも、そのことだけを見つめていては、その内容や意味を本当につかむことができないのではないか。もつと広くその時代のことを知り、さかのぼつ

て、その時代の初めからの文化や社会の情勢や歩みを知らなくては……。」

こうした研究方法に気付いた彼は、さつそく翌日から、江戸時代の初めにさかのぼって研究を始めた。しかし、江戸時代に書かれた書物は、何種類もの写本として伝わっているものが多く、まとまった形ではなかなか思うように手に入らない。そこで、勤めのかたわら、比較的良好に集められ、整理されている上野の図書館へ寸暇をおしんで通った。こんな生活が四年ほど続いたのだろうか。江戸時代の書物を直接自分で読み、考えているうちに、どうやらこの時代の思想の動きや、そこに生きた人々の見方、考え方、感じ方などが分かり、それについての左右吉なりの考えも出てきたのである。研究者としての自信も生まれてきた。原典を直接読み、考えてきた左右吉には、これまでのものとはちがった見方ができるようになってきていたのだ。しかし、一方で、自分の考えをもっと確かなものにしていくためには、江戸時代の研究だけをしては不十分であることに気が付いた。江戸時代の人々のものの見方、考え方、感じ方は、もっと昔からの人々の生活に深くかかわり、その歩みの中ででき上がってきていると思われたのである。

こうして彼は、前の時代、前の時代へと引きずられるようにさかのぼり、いつのまにか上代にまでたどりつくことになったのである。彼の大きな学問的業績の一つに、古事記・日本書紀の研究に代表される古代史に関するものがあげられるが、その出発はここにあつたともいえる。

明治維新のことから始まって、古事記・日本書紀の時代にまでさかのぼって研究してきた左右吉は、今度はこれまでは逆に、上代から始めて近代に下っていくという順序でまとめていこうと思った。

これが、最初に述べた「文学に現れた我が国民思想の研究」だったのである。

書き始めてみると、今まで分かったと思っていたことが分からなくなり、もう一度原典を読み直して考えてみなければならないことが、次々と出てきた。ときにはかなり書き上げたものを、満足できずに破り捨てたこともあつた。また、日本のことを本当に分かるためには、世界や民族の神話や、特に、日本の文化にかかわりの

深い中国や朝鮮のことを研究する必要を痛感した。中国や朝鮮の古い歴史や古典の研究は、絶対に欠かすことができないことだったのである。彼は次第に、この方面にも力を注ぐようになった。

こうして、幕末から明治維新への一つの関心から出発した彼の研究は、真理を求めてどんどん枠を広げ、その内容も深くなっていったのである。書きあがった本は、彼の代表作の一つとなり、その後の彼の研究の方向や、学問姿勢の基となる意義深いものになった。

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道德「郷土史研究にうちこむ」

(平成十三年十一月)

1 主題構成表

主題名「自然への畏敬の念」(中学校・第2学年) 資料名「槍ヶ岳の開山」(播隆上人)

<p>■ 内容項目 D(21) 「感動、畏敬の念」 美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態(意識) ・美しい自然を守ることは大切であることは分かっている。また、自然に関わる不思議なことや神秘的なことに興味がある。 ・身のまわりに豊かな自然があるが、その存在について、感謝や感動の気持ちを忘れがちである。 (要因) ・人知や想像の範囲を超えた自然現象や事象、空間を目の当たりにする機会は少なく、そういった自然の不思議さ、恐ろしさ、美しさについて考える経験が少ない。 ・自分たちの住む町には美しい自然が多いと感じても、自然が生活の中に溶け込み、自然から生命を感じ取ったり、心のつながりを見いだしたりする機会が少ない。</p>	<p>■ 資料の分析 ・本資料は、偉大な大自然に感動し、「人間は様々な意味で有限であり、自然を通して人間の在り方や人生を見つめてきた」播隆上人の生き様を記したものである。 ・笠ヶ岳から荒々しい岩ばかりの峰が峰々を抜いてそそり立っている槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を、写真や映像を用いて資料提示をしながら伝えることで、言葉では表せない胸の震えを想像することができる。 ・生涯をかけて開山のために努力できたのは、槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動が心の支えになっていたことや、努力の末、槍ヶ岳の頂上に立つ播隆上人の心の中に、人間の力をはるかに超えた大自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れ、独善的になりやすい人間の心を振り返ることができたという喜びがあったことに気付くことができる。</p>
--	---	--

■ ねらい  
限りない自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れることが、人の心を動かし、生き方を見つめ直すことにつながることに気づき、自然を敬おうとする心情を育てる。

<p>■ 展開の構想 ・播隆上人の槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を理解する。 ・独善的になりやすい人間の心を振り返ることができた喜びとともに、自然に対する尊敬の気持ちを感じていることに気付くことができるようにする。 ・自然に対する「畏敬の念」について、自分との関わりで捉え、自然から感じる仲間の様々な感じ方に触れることができるようにする。 ・「畏敬の念」について、自分なりに多面的に捉えられるようになったことを価値付ける。</p>	<p>■ 基本発問(◎中心発問) ○播隆上人は、なぜ、槍ヶ岳に登りたいと思ったのでしょうか。 ◎槍ヶ岳の頂上に立ってまわりの世界を見た時、播隆上人は、どんなことを感じたのでしょうか。  ○「播隆上人が感じたこと」と「これまでの自分自身の自然に対する思い」とを比べた時、共通する感じ方と異なる感じ方はどんなことですか。 ○自分と自然とのつながりを振り返った時、これから、どんな時に、播隆上人が感じたような自然への思いをもつことができるのでしょうか。</p>
---	---

■ 「私たちの道徳」の活用(授業前・授業中・授業後・活用しない)  
(活用の仕方) P114~116を読み、自然の美しさ(P115)や自然の不思議さ(P116)について考えを書く。